

「自由」「経済」「階級」「宗教」「投資」「人民」「共和」・・・などの漢語は、明治時代に日本人が造った和製漢語と言ひ、中国から取り入れたものではありません。現代中国でもこれらの漢語は多く使われていますが、明治時代以降に日本から導入したものです。これらの漢語が意味する西洋の“物”や“概念”は、それまでの日本や中国にはなかったものなので、創出するしかなかったわけです。「経済」などはまったくオリジナルと言うわけではなく、中国古典にある‘経世済民（世を経[おさ]め、民の苦しみを済[すく]うこと）’の意を含んだ短縮形と言えるでしょう。ただ、高度成長時代の猛烈ビジネスマンが economic animal などと呼ばれては、創出者の意図を汲み取れているとは言えませんが・・・

講座では、現代語による意識では気付けない、聞きなれない“漢語”の解説がありました。[跪拜]、[邸閣]、[持衰]について考えてみました。

右の漫画は、王から論功行賞を賜っているところなので、片膝を付いて手は自然と賜物の剣を受けていますが、普通に跪拜をするときはどうするのでしょうか。ドラマなどでは、右拳を左の掌で包む“拱手”の形が見られますが、どうでしょう。また、図のように片膝でなく、両膝をつくような形だったのでしょうか。何れにしる両者の間には、大きな身分差が感じられる仰々しさがあり、その代りに[拱手]で済ませていた倭人には、余り身分差はなかったのでしょうか。

[邸閣]と言う漢語は古代中国の文献にも度々登場し、たとえば前漢代の国家的穀倉である京師倉とされる華陽華倉遺跡などが挙げられるそうです。しかし下に示したその復元図を見ると超大型の瓦葺建物なので、とても倭国に存在したとは思えず、研究者を悩ませているそうです。

陳寿やその上司を取り立ててくれた司馬懿には、西域を担当する曹爽と言うライバルがいて、西方の果てにある大月氏国に朝貢させたことが評価されていました。対する東方の果てから朝貢した倭国が、蛮夷の小国であるとは書けなかったのでしょうか。吉野ヶ里遺跡から南内郭西方倉庫群が出土して、倭国には少しばかり規模の大きな倉庫群があったのは確実です。その情報を得た陳寿が、似たような目的を持つ中国の大構造建物と、敢えて例えるような表現をしたのかも知れません。

南内郭西方倉庫群はその規模の大きさから、周辺の集落から租税を徴収していた可能性も指摘されています。税と言うと太閤検地のように、まず耕地を測量し、そこから徴収量を算出するイメージがあります。中世と古代で精度の差はあるとしても、発想そのものがあったのか納得しきれないところがあります。むしろ、耕作地は共有地であり、そこで得られる収穫物は一旦全て倉庫に格納し、定期的にその都度平等に分配する方が、実施し易かったような気がするのですが・・・

講座でもあったように、[持衰]という言葉は、中国の全ての典籍を当たっても、倭人伝を典拠とする文書以外には出てこないようです。似たような風習は、東南アジアの海洋民族にあったようです。でも、中国中原は海から遠く離れた内陸にあり、そんな風習はなかったし、沿岸地方にも疎かたと思います。おそらく陳寿を含め、倭に赴いた梯儁や張政らも初めて見聞したものですから、倭人がその人物を呼んだ“発音”を、その様子を説明するのに相応しい漢字で当てはめたのではないのでしょうか。余りに相応しすぎて、倭人の発音など関係なく、[持衰]と表現したようにも思えます。

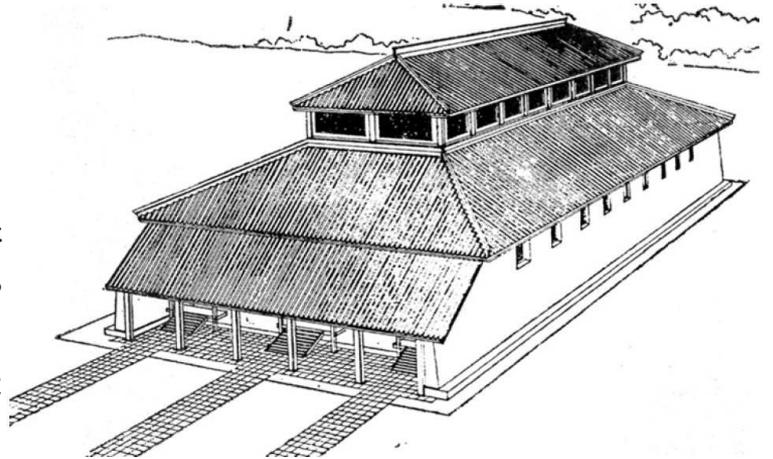
聞きなれない漢語を丁寧に読み直してみると、倭人の拙い行為や建物を、中国の儀式や式典に定められた動作を引き合いに出すことで、司馬懿が担当する東域の果てから朝貢した倭国が、広大で高い文化を擁していると訴えたかったようです。

倭人伝には当時の様子が忠実に描かれていると考える現代の研究者は、当時の倭国が東夷諸国と比較して勝るとも劣らないレベルと想定し、そのような政治・行政システムなら列島を統一する中央集権化が進んでいたと考えます。そして権力(武力)による支配が一番進んだ地域として、倭国の中心に畿内が選択されると、誤解が蔓延しているのかもしれない。

※ 古代史(弥生時代～飛鳥時代)に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論 大募集 (体裁は自由ですが、文書をお願いします)



跪拜して受ける論功行賞



前漢・京師倉復元図